

## 身延文庫所蔵

### 日重著『和語雑雑抄』の書誌と概要

中尾 堯

#### 一 はじめに

身延山久遠寺の「身延文庫」に収蔵される豊富な典籍については、伝統的に護持の長い歴史があり、特に近代になってから聖教の保存を目標とする、整理と分類作業が長期間にわたって続けられた。その成果は、平成十六年に身延町教育委員会から公刊された『身延山久遠寺史料調査報告書』所収の「身延文庫典籍」であり、その後を受けた『身延文庫典籍目録』上中下三巻である。その目録に収められた聖教類に身延山第二十世住持日重（一五四九—一六一九）の著書があり、十四部二十六冊の目録が収録されていて、そのなかに『和語雑雑集』十冊の記事がある。

この『和語雑雑集』<sup>(注1)</sup>の書名は夙に広く知られていたが、叙述には和文が主流を占めて仏教学の範疇を超え、解説には国文学の知識が要求されるので、同時に執筆が進行された『見聞愚案記』<sup>(注2)</sup>に反して刊行には至らなかった。昭和三十年代に、身延山短期大学を訪れた時、当時教授であった室住一妙師から『和語雑雑集』の一部を提示されたが、その達筆な筆致の故にとっても手に負える書ではないと判断したことを思い出す。今日、『和語雑雑集』の冊子のなかに室住一妙師自筆のメモや封筒などが挟まっています、師も翻刻を意図されていたのではないかと推測される。

最近の平成二十九年秋に、内野法主猊下から「身延山文化財調査研究委員長」のご下命を受けたのを機に、『和語雑雑集』の翻刻を発意した。幸いに布教部の林是恭師の協力を得て、本書についてできる限りの整序と翻刻を進め、全体的な見通しを立て『身延山資料叢書』として出版することになった。本書の刊行に先だつて、まず『和語雑雑集』の書誌を試み、その全体像を紹介するところである。

## 二 『和語雑雑集』と『見聞愚案記』

京都本満寺の住持であった日重は、慶長七年（一六〇二）に身延山の住持に招聘されたもののこれを固辞し、弟子の日乾ついで日遠を推挙して赴かせた。<sup>(注三)</sup>その後、元和四年五月に執筆を始めた第九章「歌詞同心異」の帖に、「元和四戊午五月日 花洛本満寺十二世 身延山二十世 日重 行年七十」の署名と朱印があるので、元和四年（一六一八）五月までには身延山久遠寺第二十世となっていたことがわかるものの、実際には赴任せずに猶も京都に庵室を構えて著作に専念していた。

庵居する日重が、後世に教学書として尊重される『見聞愚案記』二十四巻の執筆を始めたのは第一巻の奥書によると六十七歳の慶長二十年（一六一五）四月十七日で、第二十四巻の執筆を終えたのは七十一歳の元和五年（二六一九）とみられる。<sup>(注四)</sup>『和語雑雑集』の執筆はこれより少し前に始まったようで、第二章「菟玖波集と新撰菟玖波集」の執筆を開始した日付が六十七歳の慶長乙卯（二十年）二月廿四日で、七十歳の元和四年（一六一八）の年紀が記された断簡が別の帖にみられる。<sup>(注五)</sup>このような記事によって、日重の『見聞愚案記』と『和語雑雑集』の著述は、老境に至りかつ病弱であった本満寺日重の、僧と俗の両面にわたる営みの総括としての意味をもち、本満寺に構えた庵室において同時進行の形で進められていたことがわかる。また、日重の『和語雑雑集』と『見聞愚案記』の両書は、著作の後に早くから一門の間に知らされていたようである。

当代の文人僧として知られる深草の元政（一六二三―一六八）は、『草山集』の「本満寺日重伝」<sup>(注六)</sup>において、日重の『和語雑雑集』

を次のように称えている。

聞人（細川）幽齋及び紹巴が輩、方外の交を為す。相逢ふ毎に清談日を度る。師、其の蕃露を拾ひて集む。凡そ十余卷、名づけて和語集と曰ふ。倭歌を嗜む者、之を写して、枕中の秘と為す。（原漢文）

これに続いて、『見聞愚案記』についても賞賛を惜しまない。

晩年手づから（見聞）愚案記を抄す。百家の言、問へ雑へて録す。尤も蒙学に便す。之を獲る者、窮兇の暴に富めるが如し。其の余の抄記、枚挙すべからずと云ふ。（原漢文）

元政は日重より一世代後の僧で直接に面識はなく、『草山集』は寛文三年（一六六三）以前には編集を終えているので、『和語雑集』と『見聞愚案記』の両書についての高い評価は、日重没後遠からぬ時期の世評を反映したものである。実際、『見聞愚案記』は万治元年（一六五八）に刊行されてから、江戸時代を通して京都村上勘兵衛から幾度も版を重ねている。（注七）

一方、身延文庫に納入された『和語雑集』は、早くから虫害によつて著しく荒廢し、かつ乱丁の度が激しい状況にあった。本書の書函に収められている「『雑々記』入箱記」には、天保九年（一八三八）正月廿五日付の次のような記事がある。

（朱書）「二卷」日重上人御書

和語雑々抄

十九冊の内

（朱書）「十二・十九式冊不見、後日可尋事」

此和語抄十九冊 十二ノ巻 十九ノ巻 故纏 十四束

今式冊不見、後日尋可入、余むしはミ散々成り居候故、桐にて箱をさし置候、時々虫払の為拜見可致書也、

天保九正月廿五日 百人一首 □聖院日考（花押）

あまりにも虫食みがひどく散々な体なので、桐箱を作つて収めて納入しておくので、度々虫払いのために見るようにという意

味である。その荒廢に歸した理由は明確ではないが、『見聞愚案記』の例に倣って『和語雑雑集』の刊行を意図したものの、作業が難航して頓挫したままに日を送ったためであろう。「百人一首 □聖院日考(花押)」とある日考については不明であるが、「百人一首」と異名があることからみると歌人僧と思われる、和歌についての造詣によってもとは十九冊あった『和語雑雑集』を十四束にまとめて保存を計っている。

近代になると、先述のように身延山短期大学の室住一妙教授が、『和語雑雑集』の整理と翻刻を意図し着手されたものとみられ、実際に、昭和三十年代の封筒が挟み込まれ、文脈をたどって整序して半紙で類別した跡がある。『身延文庫典籍目録』を作成する過程で、この『和語雑雑集』を入れた桐箱は、身延山大学図書館の書庫にあり、これを身延文庫に返したことを覚えている。図書館の開館に合わせて、室住教授の研究室から書庫に移されたのであろう。

これらの事実によって、『見聞愚案記』と並んで有名な『和語雑雑集』を整理し、翻刻・出版の試みが早くから度々なされたものの、遂に実現しないままに今日に至った経緯が窺われる。

### 三 『和語雑雑集』の構成

『和語雑雑集』が身延山に寄進された時点では、十九冊の全体が揃っていて、冊番号が表紙に記されていた筈である。その体裁は、料紙を上下二つ折りして、縦十七cmに横二十五cmほどの料紙の一方を綴じて、表裏に表紙を付けた和綴の冊である。その一部には反故裏書が認められ、色紙の混入も見られるほどで、全体の雰囲気としてはいわゆる雑記帳的な書である。ところが、残存状況はあまりにも不良で、綴じ紐が失われて欠失または混乱した部分が多くみられ、現在では一部を残すのみで冊の体を成さないのがみられる。しかも、伝来する冊はすべて完結しない零本で、なかにはわずかに冊の一部のみを残すもの、あるいは後世に乱丁のまま綴じなおされたものなどがある。<sup>(五八)</sup>

一方、『和語雑雑集』を内容的に見ても、全体的に部分的な抄出が顕著で一貫性がなく、いわば「思いつくまま」の記述で、この形式は『見聞愚案記』においても同様である。書中にしばしばみられる「そこはかとなく書付けり」という感懐は、両書を通しての執筆態度であった。したがって、現存する冊のすべてを整理することはとても不可能なので、まとまりのあるものを選んで冊を整えて編集し、ともかく書冊の一覧を作成した。

これらの書冊には、表紙があつて表題などが残っている冊があり、さらに『和語雑雑集』の内題に続けてその冊を書き始めた年紀が記されているものもある。この記事に基づいて、各冊を執筆開始の年代順に配列し、その前後に『和語雑雑集』の全体像を窺う上で有効な冊を置いて、可能な限りの整理を試み、その冊毎に表題をつけて全体で十一項目にわたる目次を完成した。この『和語雑雑集』は、令和三年度に『身延山資料叢書』として出版の予定があるので、この書名の配列をもってそのまま章立てとする。

各章の表題については、全体の内容が首尾一貫するものではないので、一応の見当をつけるためにこれを設けることとした。その方針は、一冊全体を通してほぼ同一の原典からの抄出である場合はその書名を掲げ、原典が混在する場合には最初の部分の文意をもつて表題とした。したがって、表題通りの内容で一冊全体が完結するものではなく、いくつもの項目が収められている。このように『和語雑雑集』の整理を一先ず完了し、稿本を作成することが出来たので、原本の各冊を章立ての順序にしたがつてまとめ、従来の桐箱に納めた。しかし、整理し兼ねた端本が多く残され、その扱いには他日を期すこととして、一つにまとめた上でこれも同じ桐箱に納入した。

#### 四 『和語雑雑集』の目録と内容

現存する『和語雑雑集』の中から、冊子本の体裁をなしているものを、一冊一冊と配列して章立てを行い、十一章からなる次

の目録を完成した。

- 第一章 日蓮と日重の詠歌  
第二章 菟玖波集と新撰菟玖波集 慶長乙卯（二〇年）二月廿四日より執筆  
第三章 哀傷歌 慶長乙卯二月廿九日より執筆  
第四章 在原業平 慶長廿乙卯四月十一日より執筆  
第五章 百人一首聞書略抄 元和二丙辰年正月六日より執筆  
第六章 古今集の抄 元和丙辰六月六日より執筆  
第七章 懐旧 元和二丙申十一月七日より執筆  
第八章 四季の月の歌 元和三年十一月十七日より執筆  
第九章 歌詞同心異抄  
第十章 古稀の歳  
第十一章 勸学の事

○第一章 日蓮と日重の詠歌  
このように構成した『和語雑雑集』について、各章（冊）毎にその内容の概略を略述し、全体的な把握と理解を得たいと思う。

表紙と初めの部分は欠失しているので、執筆の時期は確定できないが、『和語雑雑抄』の初出の執筆が慶長二十年（一六二五）二月であるから、これからあまり隔たらない時期であろう。ここでは、日蓮の和歌を掲げて所感を述べ、日重の和歌・連歌をはじめ、その周辺を窺える記事が多く記されているので、紹介の意をこめてこれを第一章とする。

この章は前欠で執筆の時期は分からないが、蟬丸の歌三首をはじめ、古今集・枕草紙・源氏物語・新古今集などから哀傷歌を選び出し、短い解説を付けながら列挙する。ここには、みずから「病中」といい「老耄」の身という日重の、移り行く諸行無常

の世とみずからの老少不定の心が映し出されている。某の 山の端に影かたふきてくやしきはむなしく過ぎし月日也けり の一首を挙げて、一生を悔しく回顧する作者の心中を推しはかり、「老後の身心肝に染て侍る哉」と述懐している。さらに『徒然草』を引いて道を求める者の心得を説き、「老来りて始て道を行ぜんと侍る事なかれ」と、老年を思い日頃の精進をすすめる。

次いで、日蓮聖人の和歌五首をあげ、これを連歌師の里村紹巴に語って「その歌情感あり」と賞されたという。「祖父了派」は、これら「蓮祖の御歌」を「末の集」に入れたと物語ったと述べる。この記事は、連歌師として知られる石井了派が、日重の祖父でありかつ法華（日蓮）宗の熱烈な信者であったことを物語る。了派は、連歌師宗祇の門人で、三條西実隆から古今伝授を受け、永祿二年に没した連歌師である。また、日重の叔父も連歌師で、「母方の叔父英怙まかりける時よめる」とあって、甲い(注九)の一首を詠んでいる。これらの記事から、日重は有力な連歌師の家筋から現れたことがはつきりする。

日重は自作の連歌と和歌を、合わせて三十首ばかりを紹介する。なかでも、「臨終には病苦等に取紛、覚悟あるべからず」と思つて、あらかじめ「辞世 二首」(注一〇)を詠み、弟子たちに語っていた。

詠来し浮世の花はちりぬとも驚の高根にあり明の月

法花経の教をきくにたのもしな処は寂光身は仏なり

この外に、度々連歌会にのぞみ、近衛・烏丸・正親町ら、公家の面々とも深い交わりがあり、月並の連歌を催していた様子が窺われる。ちなみに烏丸光広（一五七五—一六三八）は、幼年の時に日重に託されて、学問に開眼したという。身延山久遠寺の住持となつて甲斐国に下向した弟子の日遠に、「入るを見よ出るをし見ん空の月」と、「秋の比の便宜になつかしさのま、此発句をして」遣わした。日重も連歌師石井了(注一)玄の子で、後に身延から連歌の懐紙を送つてきたところ、その執筆者が堯順であったので床しく思つた。また、天橋立を訪れ、有馬温泉に湯治に行き、みずからの六十七歳の病中を悲しみ一首を詠んだ。

七十に及べる年の暮なればなにつけても物ぞ悲しき

日重にとつて、古稀を迎えようとする七十歳の老年と、広い人とのつながりを離れて病に沈むことは、本満寺の住持ではある

ものの、孤独で悲しい日々であった。このような情感が、二月からの『和語雑雑集』の執筆を日重に発起させたとみられる。この書を整える一方、六月からは仏法の雑雑集ともいべき『見聞愚案記』の執筆を並行して始め、日蓮（法華）宗の教学について典拠を明示しながら所見を述べている。

最後に、和歌・物語文学など数多くの古典の書名を列挙して、その解説を略記している。物語では『宇津保の物語』『源氏』『伊勢物語』から『方丈記』『徒然草』『神皇正統記』まで、歌集では『万葉集』『廿一代集』をはじめ多数の書名、歌論書では『秀歌之林大略』『歌林良材集』『名目抄』などが、全体的に順序不同で列挙されている。これらの国文学の書名は整った形ではなく、全体的に整理が不完全なままで収録されている。このような不揃いな書名の列挙は、系統的に書名を紹介し解説するというよりも、実際に日重が住持である本満寺の私的な文庫に所蔵されていた書物を、逐次列記するという営みを意味する。『和語雑雑抄』の著作は、このような蔵書を背景に実現したものと考えられる。

## ○第二章 菟玖波集と新撰菟玖波集

日重が六十七歳の慶長二十年二月廿四日に書き始めた、和歌と連歌の雑雑記で、『菟玖波集』と『新撰菟玖波集』の抜き書きに、他の古典を抄録しながら日重の知見と評論を交える。この一冊を書き終えたのは同年の二月廿九日であるから、五日間でこの書を書き終えたことになり、かなりの速筆が窺われる。

表紙から始まる「追加古狂歌書集」には、十首ばかりの狂歌を収める。近衛三藐院信尹（一五六五—一六一四）が、文禄三年（一五九四）に後陽成天皇の勅勘を蒙って、薩摩国の坊津に配流された路次を、路すがら車ではあらで大臣をのするか嶋になふばうの津と詠み、「二条河原の落書」で有名な京童の伝統につながる狂歌に関心をよせる。「狂歌の格をしらしめんため」に狂歌を追記した。

次いで「和語雑々抄 慶長乙卯二月廿四日始之 日重」と内題を記し、執筆を始める時の感懐を述べる。当時、日重は六十七歳であったから、「老後ことに病中行く方もなく、徒然なるままに」日を送り兼ねて、昔からの見聞や所感を心にしたがつて書付

けようとす。老眼をぬぐいながらの、まさに老いの情熱を燃焼させての営みは、「我さえ片腹いたし」という気持ちとはいっても、それは反語であろう。

本文は、連歌の作法として賦物と切字をあげ、賦物には一字露頭・二字通音・三字中略があるといい、十八の切字をあげている。里村紹巴に、どうして発句に必ず切字があるのかと問い、「歌に必ず切字ある故」と答えられ、「なきもあれ共多分ある也」と、十分納得はしなかった。日重は里村紹巴（二五二五—一六二〇）を連歌の師として親近し、たびたび歌道と連歌の指南を受け、『和歌雑集』にはその和歌や連歌が引用されている。英怙が父了派の年忌に連歌を興行した時の昌叱の一句を引き、石井了玄が中風で没した時には紹巴亭で弔連歌を興行したと記す。日重の里村紹巴（一五二五—一六〇二）をはじめとする連歌との深い関りを語る、大切な史料として注目される。

紹巴の一派が窮愛していた昌叱の子岡菊丸が早世したので、紹巴は 根さへかれて春に若葉の菊もなし と詠んでいる。日重は、このような哀傷の句に心を寄せるとともに、昌休の五十年忌や紹巴の父の年忌の連歌をとりあげ、みずからは摂津国池田に宗祇の影像を見、本願寺に伝来する小野小町の絵像をみての連歌の興行に加わるなど、連歌界での活動範囲は広がった。『和語雑集』に連歌を引く心情は、先人の連歌を引きながら亡き人を追憶し、老い行く自らの姿に無常観をさらに深めていく。続いて、日重自身の体験や伝承、さらに該博な知識をもとに、先人の連歌を選んで適宜に簡潔な解説をくわえ、『菟玖波集』『新撰菟玖波集』などの連歌を抜書する。

日重は、連歌集から選びあげる句の基準については何も言わないが、選ばれた句によってその心情が窺われる。紹巴が点者となった独吟の百句には、孫を失った石井英怙が、『法華経』の「於我滅度後」の一句を念頭に、おしむにも消る夜やた、桜の花の露 と詠み、深い悲しみを切々と訴えている。『菟玖波集』第十一の「羈旅連歌」に、御製の 坂もくるしき山のつ、らおり を選んだのはじめ多くの句には、僧侶として旅に出ることの多かった日重の感懐を引きたてるものがあつたはずである。

『新撰菟玖波集』巻第十三「雑連歌」からは、多くの句をとりあげて歌材は豊かで、心敬の「恨ある人をも世をも捨はて、」の句

で終わっている。次いで、『菟玖波集』第十八にある「神祇連歌」と「釈教連歌」をえらんでいるのは、僧侶として自然な心情といえよう。

連歌の抜書の列挙が終わると、「雑々」の項目で「連歌式目」のうち、語句の「隔」が「惣じて連歌の指合ハ理をせめたる、一々けにもにて面白し」と、実例を挙げて解説する。例えば、「吹雪」の語については、風と同類の語を用いるには五句、雪の類語では三句ほど隔てなくてはならないとするような、「隔」のきまりである。この類語については、「簞物には四つあり、霞・霧・雲・煙也、此中霧ばかりそひきに三句、降物に二句隔也」と、多くの用例を挙げて説明している。これらの例をみると、連歌では「隔」の決まりが実に重要な意味を持つていたことがわかる。文中に「私云、新式の聞書別帖にあり」とあり、連歌師は新しく加わった「隔」の取決めを帳面にメモして持っていたものとみられる。連歌の作法について、さらに用心すべき点を、古典から歌・連歌を引用しながら列挙し続ける。「只今の道は上中当の三の時を能分別」することが神慮にも仏意にも叶い、「本歌取り」は堀川院の時代（二〇七九—一〇七）を下限とし、「その心似合侍らぬは詮無し」などと、『吾妻問答』を抜書する。

このほかに連歌の作句の上で用いる用語や事物などを、それこそそこはかとなく列挙して解説を加える。ここには、師から相伝し体得した連歌の道を、後世に書き伝えようとする、強い意志が窺われる。

### ○第三章 哀傷歌

日重が六十七歳の慶長二十年（一六一五）二月二十九日に書き始めた和歌の雑記で、一冊の内ごく一部しか残っていない零本である。内題に「和語雑々抄 日重行年六十七 慶長乙卯二月二十九日」とあり、『和語雑々抄』二を書き始めてから六日目には新たにこの冊に進む速筆である。冒頭には、この書を執筆する意図と老年の感懐を次のように披歴する。

まず「不堪といひ老耄といひ病中といひ」と、年老いて万事はかゆかなくなりそれに病気の中なので現況を述べるが、当時盛んな著作活動から推測すると、これはむしろ謙遜の意であろう。この帖には「昔見し事聞し事」をそこはかと書付けているので、歌の用語・作者・歌集の名など、間違いが多いと危惧する。とにかく「ことに思ひ出るをまゝに筆にまかせて書付け」たと

述懐する。

抄出の内容については、「無常・哀傷・述懐・道歌・老等一具に書きまじゆ」と、諸行無常の世を觀照する和歌を抄録し、老年に及んだ日重の感懷を表白する。続いて、慈鎮・西行・紀貫之・和泉式部等の歌を、古今集・新古今集・伊勢物語などから抄出し、なかでも古今集の「哀傷歌」に共感を示している。徒然草の「都のうちにおほき人しなざる日はあるべからず」に続く無常觀は、生死の境を鳥辺・船岡の煙によってよく語られるが、現世での別離の悲しさも別ではない。逢坂の別れをうたった歌を最後に、この一卷は中断する。

あふ坂の嵐の風は寒けれど行衛しらねばわびつつぞぬる

○第四章 在原業平

日重が六十七歳の慶長二十年四月十一日に書き始めた和歌の雑雑記で、表紙に「重師撰 廿年四月 和語雑々抄」とあり、内題に「和語雑々抄 日重行年六十七 慶長乙卯四月十一日」とある。冒頭には、この書を執筆する意図と老年の感懷を次のように披歴する。

まず「老耄殊病中つれつれなるま、思ひ出る事」を筆にまかせて書付けるので、すべて理にかなっているわけではなく、「小僧等自然（この書を）見るとも用心すべし」と、後続の読者にむかって注意を念記する。

本文にはまず在原業平を挙げ、そのやんごとなき種姓を明らかにし、好色なる故に時に会わなかった生涯を追う。さらに妹や契りを結んだ女人など、その周辺の人々との間を『伊勢物語』などから引用した歌によって語る。用語については、「有そかし」の語が御妙判に多いと述べる。この「御妙判」とは日蓮遺文のことであるから、これらの解説文はただの抄出ではなく、日重が相伝しあるいはみずから感じた批評であろう。

『伊勢物語』百十四にある、在原業平が没して七年後の仁和二年十二月十四日に行われた、御狩の芹河行幸にあたって在原業平が詠んだ歌が誤解され、光孝天皇の御気色を損じたことをあげ、その一首を挙げる。六十九歳の業平が自身のことを詠んだのに、

五十七歳の天皇に皮肉と受け取られたという。みずからの老年を意識して選んだ歌である。

おきなさび人なとりめそかり衣けふばかりとぞたへもなくなる

次いで『徒然草』を抄出する。九条殿の遺誡をあげて、美麗を求めず質素を旨とすべきといい、驕りを排して思慮深く控えめに過ごす旨を抄録する。続いて処世の心得を述べ、酒の功罪をあげる。長文を抄出して、庵居する兼好の心と相通じるところが多かったと思われる。

法華（日蓮）宗の僧の身に老年を迎えた日重の心は、仏教信仰の心情を詠む「釈教歌」に向かうのは当然である。『法華経』の「一心欲見仏」「宝樹多華果」「常在靈鷲山」等の語句や、「不軽品」「寿量品」「嚴王品」等の品名にちなむ歌を選ぶ。慈円の人口に膾炙した一首

おほけなくうきよのたみに覆ふ哉わかたつそまにすみ染の袖

を取り上げる。このなかに「おほけなく」の語があり、「おほけなくは恭の字也。祖師のおほけなく国主迄とこそ思へとも、われともちひられぬ世なれはをよはすと、御遊ばす同じ心也、殊勝也」と感想を述べている。

一方、日重はこのころ『見聞愚案記』の執筆を企画し、四月十四日から書き始めているから、『和語雑々抄』にも当然ながら法華教学が反映しているはずである。「十界」「自業自得果」等について語り、釈尊一代の諸経を「自業自得果ノ五ノ文字なるべし」という。さらに、仏教の情感を表明する一首を掲げて終わる。

なにかおもひなにとか嘆く世中はただ薺の花のうへの露

#### ○第五章 百人一首聞書略抄

日重が六十八歳の元和二年正月六日に書き始めた、宗祇の『百人一首聞書略』の抄出である。『百人一首聞書略』については、写本が『百人一首抄』の書名で宮内庁書陵部に収蔵され、その奥書によると、文明十年夏四月十八日に宗祇が執筆して宗欽禪師に贈った真蹟本を、安永五年四月中旬に平頭仲が「模写」している。『和語雑抄』の年紀については、『百人一首聞書略』の抄

出の終わりに「元和二年丙申正月六日 行年六十八 日重（花押）」とあり、この時に抄出を終えたことがわかる。

表紙には、まず花の一首を掲げる。

笛竹の声おかしきこゆるは花ちりたりとけふは也けり

続いて、『百人一首聞書略』の序文の要点を抄出するが、抄出された文は必ずしも原文に忠実ではなく、全体的に取意である。書名については、冒頭に「百人一首聞書略」とあるので、これに依った。次に「宗祇註の奥書云」とあるが、写本によるとこれは「序文」にあたり、内容的にもこの方が意に叶っているので、写本の形式に従って「序文」とする。

序文には、「京極黄門小倉山山荘色紙和歌」を世人は「百人一首」とよぶ。百人一首を選んだ意趣は、（和歌はもとより実を根本にして花を枝葉にして詠むべきなのに）、「新古今の花の過たる事を、口惜思ひて撰置かるる也」と、後堀川院の時に「新勅撰集」を選ばれた。その心は、いまの百人一首と同じで、十分のうち実は六七分で花は三四分である。この観点から見ると、「古今は花実相對、後撰は実過分、拾遺は花実兼たり。一集一集を見て時代の風を知るべし」と、宗祇の感懐を抄録する。

本文は、百人一首を順番に従って取り上げる『百人一首聞書略』の抄出であるが、解説文は抄というより大意をまとめたものである。ここに取り上げる歌のはじめは天智天皇の一首で、順次歌を掲げて解説を加えている。

秋の田のかりほの庵の苦をあらみ我が衣手は露にぬれつつ

「かりほ庵」の意味と読みについては、これは「菫穂の庵」か「かり庵のいほ」という二説をあげ、「かり庵よろしかるべきにや」と判じ、庵の荒廢によせて一首の意味と心情を説き、天子の王道を思う心の述懐に思いをはせる。対して日重は「一説は菫穂の庵、一説はかり庵のいほ也」といい、「古の歌は同じ事を重ねてよむ事常の儀也」と、両者を巧みに会通している。この外に、歌そのものにはたいする智識や歌人の伝承などを筆記し、私見を加えたりしている。

百人一首の解説が一通り終わったところで、後跋を記して叙述の意図などについて述懐する。日重が若い時、臨江齋紹巴法橋から、百人一首の作者の読み方、歌の清濁などを相伝された。これを弟子の僧たちに校合させるとき、この『百人一首聞書略』

をはじめする古抄と、紹巴が語ったことなどを交えて書き入れたという。この一冊の内容はまさにその通りであって、日重の手許には紹巴からの聞き書きを記したノートがあったことは想像に難くない。又、「老耄、殊病中の事なれハ、模字、落字、義理等正躰あるへからず、後見之人垂<sub>レ</sub>添削<sub>レ</sub>給へ而巳」と念記し、「元和二丙辰正月六日 行年六十八 日重」と記している。

「追加」では、和歌についての知識の断片を、思いつくままに記す。「百人一首」は『新古今』の後『新勅撰』の前といい、「時代年代これを明かにすべし」と課題を示す。定家の著書について、定家の「三部集」とは、「詠歌大概」「百人一首」「雨中吟と未來記」で、『秀歌大躰大略』もその撰集である。世に定家の「三ノ双紙」と称するものがあるが、細川玄旨は真作ではないというなど、江戸時代初期には歌集や歌論集の書誌が、盛んに論議されていた様子が窺える。これらの追記の分部は、日重がまだ若い二十二歳の頃に、本覚院某が摂津国の堺で講釈したのを聴講したメモである。この本覚院（真軫）と称する僧は、京都に長く住んでいて、紹巴から歌道を学んだ僧であった。

#### ○第六章 古今集の抄

日重が六十八歳の元和二年六月六日に書き始めた、定家本の『古今集』を基にした和歌の抄出である。まず『古今集』第十物名歌から十六首、墨滅歌から三首、計十六首をあげ、ついで「俳諧事」として第十九「雑躰」の歌をとりあげ、「戯事にて、しかも妙義を顕はせる也」と注目し、「十九俳諧の歌」を撰んでいる。

我君は千代にや千代にさされいしの岩ほとなりて苔のむすまで

この歌の意を、「今の時」と「無限の時」という、「二を対する」意味があるという。これに類するものに、海と山・相生の松・男女など例は多く、歌を詠むうえで重要な要素になる。このほかに、春に秋、朝に夕暮、花に木の葉など、「能対せり」という。

ここで「第九の段」とあつて、抄録の原本の存在が窺われるが、現段階ではこれを確定するに至っていない。さて、歌道が広まったのは「奈良の御門の御時」といい、このころ柿本人麻呂と山部赤人が現れて歌仙と謳われた。この御門については異説があり、『古来風躰抄』では聖武天皇の御代という。『万葉集』が撰せられた時について、紹巴は、「ある人：貫之に問たれば、神

無月雨ふりおけるならのはの名におふ宮のふる事それ　とよまれし也。万葉集は平城天皇の御時撰せられたる事は歴然也」といふ。

定家は、僧正遍照を高く評価し、「心なき草木鳥獸に心付て云るは皆偽りなり、ものいはぬ花・紅葉・雪にも物いはするは歌にてはあれ、是か歌道にてそ」と、和歌の真髓を語った。

日重が学問のために南都に住んでいた時、律宗の不退寺に五月二十七日の会式を見物に行った。この日は在平業平の祥月忌日にあたり、直筆の讚のある「業平の影像」が掛かっていた。業平の歌はほとんど勅撰集にあるので、これは辞世の歌ではないかという。

ねぬる夜の夢をはかなみまとろめばいやはかなにも成まさる也

このように、僧正遍照・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・小野黒主ら六人の「詠歌并得失の次第」を述べ、歌道の大事をよく料簡して「歌の躰」をよく判断しなくてはならない。ついで第十二段に『古今集』の成立事情を略述し、第十三段に「仮名序」の大略を抄出し、東常縁から宗祇に伝授した「古今伝授」に関わるとみられる、「常縁の講釈を宗祇法師聞書之趣」を略記する。

この聞書は、外記少納言清原宣賢、環翠軒宗尤が、逍遙院前内府三條西実隆から相伝されたもので、「古今伝授」を意味する。つまり、「古今伝授」はもともと逍遙院が宗祇から伝授され、宗祇は東常縁から伝授された。また、「其時の帝王」も逍遙院から伝授されたので、その帝王は宗祇の孫弟子にあたる。その帝王は後奈良天皇であろうか。

日重は、逍遙院実隆と牡丹花肖柏の二人が宗祇から「古今伝授」を受けたことは知っていたが、外記環翠のことは「今の抄出にてはじめて見たる也」といっている。伊勢物語の『伊勢物語』惟清抄も環翠の作といい、抜書きの親本もこのころの書であろうか。

これから後は「已下雑々」として、歌集の外に宝物集・日本書紀・源氏物語・平家物語・徒然草などを幅広く引いて、思いつ

くままを書き連ね、日重自作の一首を留めている。

いかにしてなくさむそ共古イニシエの文をしよまぬ人にとはばや 日重か愚詠也。

なかでも、ここに引用する『日本書紀』神代巻と『源氏物語』の両書が身延文庫に伝来していて、日重の手沢本とみられている(『身延山久遠寺史料調査報告書』二一〇〇三)ことは注目される。『源氏物語』については、光源氏の由来を略記し、「源氏物語目録」を巻ごとに挙げたうえで、「雲隠六帖」を加えた「源氏六十帖」があったことを述べている。又、源氏物語を抄出した書は多く、近頃のものには紹巴や昌叱の抄があるものの能本は稀で、逍遙院実隆の「細流」が「取吉」であるという。

これらの抄録を全体的にみると、和歌の作者の周辺事情に明るく、文献上の広い知見を持ち、作品については語句の読みと使用方法に特に留意する傾向がみられる。日重は、歌人というよりも、古典文学研究者として評価される。

### ○第七章 懐旧

日重が六十八歳の元和二年十一月七日に書き始めた巻で、現本は「第十五」とするが、ここでは整理の都合で第七章に置く。

初めは追筆で、幾つかの注意すべき事柄が記されている。『古今集』はすべて覚えるから抜書には及ばない。連歌の新式には牡丹花首柏の追加も見え、定家の『拾遺愚草』の抄もあるなどいう。紹巴は、堺衆の連歌が下手なのはこの『拾遺愚草』を覚えたからといい、歌を五千首ほども暗誦したという。堺には本覚院等軒という紹巴の弟子がいたので、その講義を「法華三大部」の隙をぬって聴聞した。もう五十年の前のことである。「今病中に徒然なるまま、聴聞せし事共九牛の一毛程」である。

本文は、『伊勢物語』第六十九話、業平が伊勢国に使いに行った時の、齋宮との逢瀬を歌った歌や、『新古今集』の五戒を持つ賢女が不貞を拒否する女の歌を挙げる。次いで、元和二年の大雪節に、日重は書を広げみながら、「なき世の人を友として」詠んだ一首の歌を書き止め、「我が発句共片腹痛」と謙遜している。

いかにしてなくさみむとも文ともをよまで過ゆく人にとはばや

元和二年丙辰歳暮には、

一とせはめぐりもあえぬ時雨哉

数ふれば我身につもる年月を送り迎ふとなにいそくらん

年が明けて、元和三年丁巳正月元日には、

かきりいつ思ひの外のけふの春

紹巴は、「和漢の発句は漢の古事を踏まえてしたるが吉也」といい、その和漢の発句に

散なけふ青きをふまん花のかけの一句をあげ、陰暦の二月二日に青草を踏む行事を指す、「踏青<sup>タツセイ</sup>」の古事が下敷きとなっているという。又、梅花香ながくうつす筆もかなの一句は、南宋の羅大経の随筆『鶴林玉露』の「雪を絵く者はその情を絵く能わず、花を絵く者は其の馨を絵く能わず」に拠るなどの例をあげる。

このほか、思いつくままに古歌をあげて、その類の歌をあげ、な…そ・なから・やらん・こそ・だに・しかな・いまだ等の用法を説き、歌の情感を解説する。思いつくままに古歌を選び出して、これを中心に各方面から注釈を加えるというのが、洛中・奈良・堺を舞台にして当時盛んになった、歌人・連歌師による歌の会での雰囲気であった。

藤原氏の氏寺、奈良興福寺の南円堂は観音菩薩を本尊として建てられ堂で、藤原北家の繁盛を謳う一首を抄出する。

ふたらくの南の岸に堂たてて今ぞさかへん北のふちなみ

この歌の中で「今ぞさかへん北のふちなみ」とあるのは、藤原北家の繁栄をあらわし、南円堂にその姿を映し見る意である。日重が住持となった京都本満寺は、当時は近衛家を檀越としていたので、この一首に注目して抄出したのであろう。

『古今集』別離歌にある むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬる哉 をあげ、別離歌と次の鞆旅歌とを一つにした集もあると、異本があることを指摘する。また、ほのほのと明るけしきに、天の岩戸の事を思ひやりたる心を詠む、

天の戸をおしあけかたの雲上の神代の月のかけそのこれり

の歌を選んだのは、日重が『日本書紀』神代巻を読んだことに関わるものと思われる。前述のように身延文庫に、卜部家本の『日

本書紀』神代卷の写本が二部ほど現存していることは興味深い。

日重は法華（日蓮）宗の僧であるから、依経の『法華経』の「妙莊嚴王本事品」に因んだ、をそくとく色付山の紅葉々はをくれさきたつ露やおくらん

の一首をあげて、「信心の軽重によって成仏に遅速あるべき事思ひ合わすべし」と、その心を読む。もう一首白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色付にけり

をあげ、声聞・縁覚・菩薩の三乗の修行は、煩惱を残らず滅して成仏するという、一切衆生皆成仏道の教えを詠んでいる。最後に、日重の所感をあらわす『古今集』の一首をあげる。

柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるる山路なるらん

○第八章 四季の月

日重が六十九歳の元和三年十一月十七日、病中に書き始めた『和語抄』である。まず、「四季の月の歌」として、春・夏・秋・冬の四首を撰ぶ。老年のわびしさが、うつろう月の眺めに心を引き付けるのだろう。

てりもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしく物はなし

夏の月光は秋に霜さへて郭公なくあけほのは春

秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出る月のさやけさ

秋は猶木の葉かくれもつらかりき月はふゆこそ見るべかりけれ

「忍」の語には三つの意があり、隠す事、恋したう事、こらふる事で、「歌によってよく思い分くべし」という。経論にいう「しのぶ」は多くは堪忍の意で、『法華経』にみる不軽菩薩の忍難の説話をはじめ、「忍波羅蜜」「心懐恋慕」「渴仰於仏」「咸皆懐恋慕」などの語が、仏の滅度を悲しみ仏の出現を恋慕する意味と述べる。

元和三年に崩御された後陽成院の辞世と御発句

うき秋の虫の鳴音の哀れをも今身の上の限りとぞ思ふ

月を老となる迄めてし浮世哉

日蓮聖人の「日蓮はなかね共涙隙なし」という言葉を思い出したのは、次の歌である。

声はして涙は見へぬ郭公我衣手のひつをからなん

『伊勢物語』は歌が面で詞は前書きのようで、『源氏物語』は詞書が先で歌は少い。このために、定家の『詠歌大概』には『伊勢物語』の「読様の大体」を書き、『源氏物語』などの事には触れなかった。

#### ○第九章 歌詞同心異抄

日重が七十歳の元和四年四月、病中に書き始めた「歌詞同心異」と称する、『和語（雑雑）抄』である。はじめに、「大和歌に、其詞同じくして、その心わかれる事おほし」と記し、同じ詞でもその意味合いがいくつかにわかれる場合があり、それは上下の「てには」すなわち助詞によるという。例えば、「しからめや」という言葉には、しらじ、しるらん、しりそすらん、などの意味がある。このような意味の違いを、『古今集』を主とする歌集からの引用によって、語句を掲げながら解説を加える。

例えば「だに」の一語には、「なりとも」と「さえ」との二つの意味がある。そのいずれかの意味であるが、両方を備える歌もある。「所詮歌によりて能々分別すべし」と、両方の意をもつ歌をあげる。

うき身をは我たにいとふいとへただそをだにおなじ心と思はん

以下順に、なん、へし、かも、か、や、あわれ、かなし、おうき、しのふ、などをあげる。「昔を恋したう義」の歌をあげる。

なからへは又此比やしのばれんうしとみし世ぞ今は恋しき

「しのぶ」の語句に日蓮聖人の「御妙判（遺文）」を思い起こし、「鳥は飛徳人に勝たり、日蓮は諸経の浅深を知る事、花嚴の澄観、三論の嘉祥、真言の弘法等に勝れたり、天台・伝教の跡を忍ぶ故也」と記す。法華（日蓮）宗の僧侶として出発した頃に親しんだ日蓮遺文の心が、歌道を学ぶ道筋でいつも観念の底にあったのであろう。

いとどだに下賤屋敷の内のいぶせきにうの花みたし五月雨そふる

この一首に、日蓮聖人が佐渡配流の途次に記した、『寺泊御書』にある「宿々のいぶせさ」の語を想起している。和歌に表れる語句の一つ一つに、日蓮の故事を想うというのが、日重の祖師日蓮に寄せる深い思いであった。

「うつろう」に、

色みへてうつろう物は世中の人の心の花にぞありけり

他一首を挙げ、仏教的な意義づけをしたうえで、「色見へて」を濁れば形色無く、清と読めば形色がある意味になるという。日重が広い仏教の知識をもっていたことを考えると、この見解は筆者自身のものであるろう。これに続く語句は、うたかた、かけろふ、玉のを、たまきはる、などと、無常觀を思わせる傾向にあるのは、七十歳という老いた心の故であろうか。

「わくらは」には、たまさか、たまたまの意味とともに、夏木立の中に紅葉する「病葉」を指す。この説明を記した後で、「已上巴の義也」と記し、「予、芹生山住居の時芳問にあつかり、二夜三日種々物語ありし、その内也」と注記している。日重は、連歌師として高名な紹巴と親しく接し、歌・連歌についての意見を交わっていたようである。

「はや」の言葉には、多くの意味がある。

心あらん都の人にかたらばやかた山里の秋の景しきを

さひしとハたれかいひけん山里をみせはや田子の早苗とる比

この二首の歌に、「御妙判」の「はせ参りて拝みまいらせ候はばやと御遊すと云願也」と、日蓮遺文の「真間釈迦佛御供養遂状」の一節を述べる。最後に、「悲嘆哀傷の歌」二首を、さらに大江千里の歌を掲げて終わる。

月見れば千々に物こそかなしけれ我が身ひとつの秋にはあらねど

裏表紙には、「元和四戊午五月日 花洛本満寺十二世 日重 行年七十」と記し、「日重」の印文の朱印を捺している。

○第十章 古稀の歳

前後が欠失してゐる上に、伝来する丁数も少ない零本であるが、日重の歌・連歌も収録されていて、興味深い内容である。

連歌師の明印が 朝戸明の籠は柳桜哉 と一句を詠んだ。織田信長が尾張の清州城から上洛の軍を発しようとする時である。

信長は清州城でこの一句を聞いて、「城をあくるは不吉也」といつて、連歌は上手なようだが気は下手だと評した。その後しばらくして昌叱が清州城を訪れて 木枯も及ばじ森のしげり哉 と詠むと、信長は一段と感悦した。

元和戊午四年に七十歳の古稀を迎えた日重は、

世にふるも稀なる年のはしめ哉

と詠み、当時の歌人で能書家であった烏丸光広はこれに二句を付けた。

またき雪間のわかなつむ袖

あひにあひぬ稀なる年の花の春

辻子玄哉が天正四年に七十歳で没した時、紹巴は弔歌一首を詠んだ。

世にふるも稀なる年と思はすはいかにわかれの悲しかるべき

玄哉の没年と同じ年を迎えた日重は、古稀を迎えた喜びを一首に詠む。

七十になりてもなどか物ごとに矩をこへぬるわか身なるらん

自作の歌をここにあげるのは片腹痛いことではあるが、新発意の形見と思い、ひとのあざけりを顧みず書付けたと述懐する。

ついでに、狂歌を一首。

七十になりても酒の債にてゆくさきさきにあるぞうるさき

大徳寺一休が詠んだ歌、

名にめでて一休会下にあつまれど一つもやまぬ我慢情識

の歌について、紹巴は集まる者どもは我慢情識を離れないという意といい、日重は一体自身が我慢情識を離れることができな  
意とみた。紹巴はその時は同心しなかったが、後に日重の解釈に同意した。

このことについて、日重が紹巴と歌の義理を諍うことは、日天子に会って目がくらみ、親に対して歳を争うようなのだが、  
公の場のことなのでこのような次第であったとみる。日重をはじめ、一門の者を前にした紹巴の態度がよく窺われる。

近江国での十月朔日の池田興行に、昌叱が、空にけふ人ははつべき時雨哉 と詠んだ。この一句のなかきで「つ」を清音で  
「はつべき」と詠んだので、万座の者は気にかけた。果せるかなそのちようと一年先の翌年十月一日に討死した。その死者はだれ  
かわからないが、「各人の歌連歌には先表となることありとハ也」と感懐を述べている。

#### ○第十一章 勸学の事

前後が欠失している上に、伝来する丁数も少ない零本であるが、日重の古稀の記事などがあつて、前の帖と同じ意味があるも  
のとして収録した。最初に掲げる「勸学の事」には、後人に対する教訓ともいべき書の一節と一首を掲げ、幼時から学ぶ者は  
日出の光の如く、老いて学ぶ者は燈火を持って夜を行くようなものだという。

いそげ人いつれの道をまなぶとも老てハ心つきて甲斐なし

「酒の事」については、杜子美（杜甫）の詩「曲江詩」の「酒債は尋常行く処に有り、人生七十古来稀也」の一節を引く。又、  
心こそ心まよはす心なれ心に心こころゆるすな

の一首について、紹巴は「八代集にはなき也、誰の歌なるらん」と、作者が不明だという。日重は、面白き歌といい、「心の師と  
は成とも心を師とせざれと云う経文に叶い」といって、『法華経』の妙勝嚴王品の一節をあげ、「心のまゝにせまじとある心に、  
心こゝろゆるすなに相応せり」と、歌と経文の意が一致する殊勝をいう。

日重は三十六歳の時、天正十七年に老母を喪い、読経のために芦生に籠居した時、紹巴が一首を詠んだ。

溪ふかき菊のなかれの山のへや妙なる法の行衛なりけん

この歌の前書に「本満寺住寺」と書かれたので、「住持なり」と云うと、紹巴は感じてすぐに書き直したという。帰京の時には二ノ瀬まで見送ったところ、翌日の礼状に一首添えられた。

深山路を送りて帰る衣手の露けさ思ふさよ時雨哉

紹巴の物語るに、古今伝授が都に断絶したのを、宗祇から東常縁に伝授があり、常縁が上洛して夢廬・聴雪等へ伝授された。すると今の帝王（天皇）は宗祇の孫弟子にあたる。

請雨と止雨の歌に

てる事も日の本なれば理りやふらではいかであめがしたかは（請雨）

降雨のまなし竜王やめてたべとくしやか御法人にきかせん（止雨）

この歌に関連し、日蓮聖人御書を引用して「淫女破戒の者三十一字の歌にてふらすにと御遊は、和泉式部と能因との事也」と注記する。

## 終わりに

日重が老病をおして執筆した『和語雑集』は、和歌・連歌・随筆など古典文学についての深い造詣と該博な知識に基づいた、抄録と評論の書である。その叙述は、一貫した論理に終始するというものではなく、本書と同時進行の名著『見聞愚案記』と同じように、散文的な傾向の文脈に終始している。それは、日重の出自が連歌師の家系で、里村紹巴をはじめ当代の連歌師との交わりも深く、みずからも和歌・連歌を詠む文人僧としての一面をもち、その視点から古典に相對していることにも通じ、『和語雑集』の特色として評価される。

一方、京都本満寺の住持であった日重は、祖師と敬仰する「日蓮聖人」の詠歌を紹介し、自詠の和歌・連歌を遠慮ながらに披

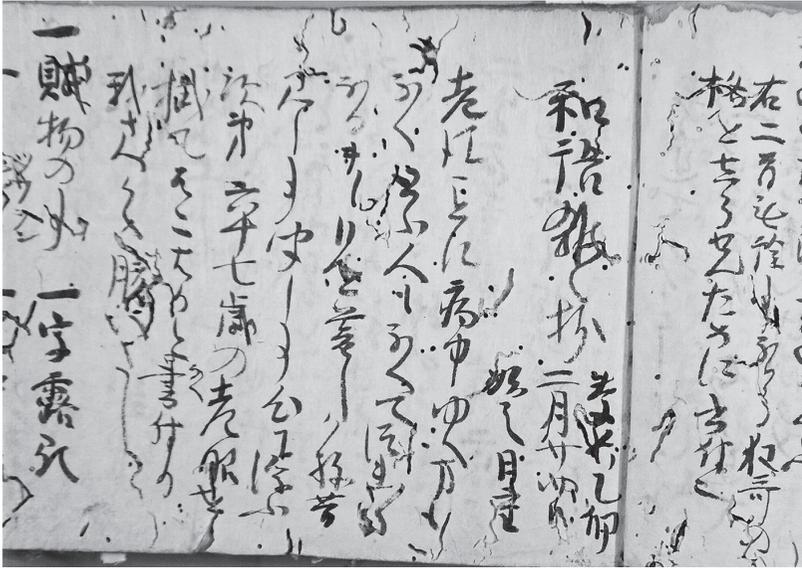
歴している。これは、『見聞愚案記』に数々の和歌を掲げるのと同じく、仏教の庶民化をはかる営みで、日重の僧侶としての自意識が窺える。当代の文人たちとの交流を物語る体験談も記され、宗門を超えて多方面にわたる活動の姿が窺える。

深草の元政は、日重の業績を高く称え、なかでも『和語雑集』と『見聞愚案記』の著述を賞賛している。<sup>(註三)</sup>この度、『和語雑集』を『身延山資料叢書』に翻刻するにあたって、本書の書誌と内容を紹介し、日重の文人僧としての営みをとおして、宗教と文学のかかわりを明らかにする一助になればと念じる次第である。

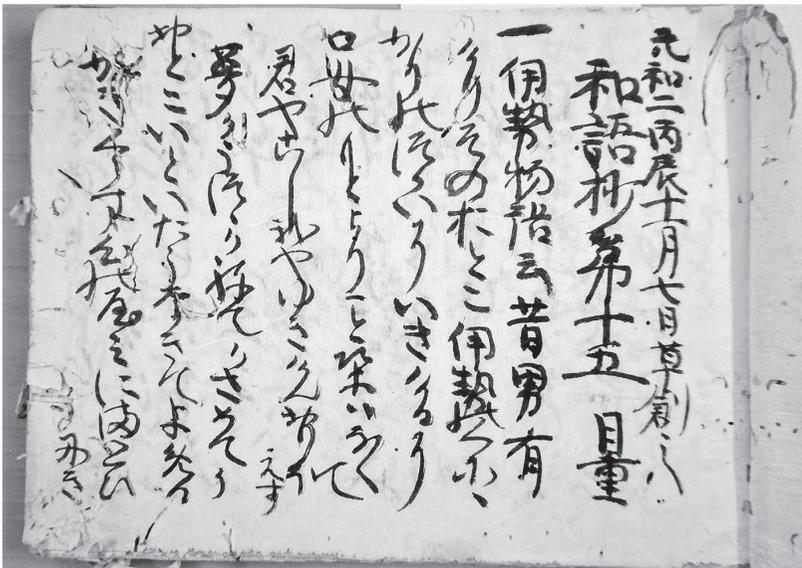
註

- 一. 外題には、『和語雑集』・『和語雑々集』の両様を用いている。
  - 二. 『見聞愚案記』『日重上人集』一、二所収 日重上人集刊行会
  - 三. 川口智康編『深草元政』『草山集』を讀む』所収「本満寺日重」の項
  - 四. 第一巻目録の奥書と第二十三巻の内題の脇書による。「慶長廿乙卯孟夏十八日拭三六十七歳老眼書始之」元和五年己未三月四日草之七十一病中記之」とある。
  - 五. 『和語雑集』のうち、この部分は乱丁のために収録していない。
  - 六. 注三を参照。
  - 七. 『日重上人集』一・二所収『見聞愚案記』には、「万治元年戊戌孟秋吉日」の刊記が、初版本から収録されている。詳しくは、冠賢一・高木豊 同書の「解説」を参照。
  - 八. 現状に見る乱丁は、『雑々記』入箱記』が記された天保九年（一八三八）頃には、すでにこのような状況であったとみられる。
  - 九. 英怙（一六〇七）は日蓮宗の信者で、影山堯雄編『新編日蓮宗年表』慶長十二年十二月十四日の記事には、『甲州大野本遠寺過去帳』の記事によって、「心性院日遠祖父了英の弟、石井英怙日雄卒」と記す。
  - 一〇. 『本満寺文書』に軸装として伝来する。
  - 一一. 日遠が石井家の出自であることは、川口智康編『深草元政』『草山集』を讀む』所収「本遠寺日遠」の項による。
- 連歌師石井家については、中嶋謙昌『石井三家系図』の成立―連歌師石井家と東九条莊下司職石井氏―（『京都大学国文学論叢』二〇〇四年所収）がある。

一二、冠賢一・高木豊「見聞愚案記」解題  
 一三、深草元政「草山集」川口智康編「深草元政『草山集』を読む」所収



『和語雑抄』巻首 慶長乙卯（二〇年）二月廿四日始之  
 （第二章 菟玖波集と新撰菟玖波集 参照）



『和語抄第十五』巻首 元和二丙辰十一月七日草創之  
 （第七章 懐旧 参照）